

6 当科大腸癌手術例における検診発見例と非検診発見例との比較

瀧井 康公・丸山 聡

県立がんセンター新潟病院外科

我が国で大腸癌検診は1992年に開始され、毎年検診の受診者数、癌発見者数が増加している。今回、この検診発見大腸癌（検診例）と症状発見大腸癌（非検診例）とを当院の手術例で比較し、検診の根治性や機能温存の面での意義を検討した。対象は1991年から2002年に当科で手術された、同時性重複癌を除く1507例。検診例は34.0%、非検診例は66.0%。腫瘍最大径平均は検診例32mm、非検診例51mm、手術時間平均は検診例174分、非検診例208分、術中出血量平均は検診例86ml、非検診例151ml、リンパ節転移は検診例27.1%、非検診例46.0%で陽性、他臓器転移は、検診例6.8%、非検診例21.9%に認め、5年生存率は検診例91.6%、非検診例71.9%であった。自律神経の完全温存は検診例90.2%、非検診例74.6%、人工肛門例は検診例11.0%、非検診例34.6%であった。

以上より、根治性を高め、機能温存を可能にするための大腸癌検診の重要性が確認された。

7 新潟県における2次検診での大腸内視鏡の大腸癌診断成績

船越 和博・新井 太・山本 幹

稲吉 潤・本山 展隆・秋山 修宏

加藤 俊幸・小越 和栄*

県立がんセンター新潟病院内科

同 参与*

【目的】新潟県での2次検診方法別、大腸癌診断能および当院での内視鏡による2次検診成績を検討した。

【対象・方法】平成11-13年の大腸がん検診の精検方法別癌発見率を県がん登録室のデータから解析した。当院の平成8-14年の2次、非2次検診受診者における内視鏡による癌診断割合（癌病変数/件数×100）、癌内視鏡切除率（癌内視鏡切除病変数/件数・%）を検討した。

【結果】2次検診では大腸内視鏡9,332、S状結腸内視鏡+注腸642、注腸3,667件で癌発見率はそれぞれ7.62、5.35、1.23%であり、大腸内視鏡、S状結腸内視鏡+注腸は注腸より有意に高かった。当院での内視鏡による癌診断割合、癌内視鏡切除率の年平均値は2次検診者群が13.1、6.6%、非2次検診者群が8.6、3.2%と2次検診者群が高かった。

【結語】2次検診の精検方法として大腸内視鏡検査が最も癌診断能が高く、また2次検診者群が非2次検診者群より高率に内視鏡にて癌が診断され、内視鏡切除されていた。

II. 特別講演

「私の経験した肛門外科」

新潟県労働衛生医学協会

三輪 浩次